

救済から自立へのサポート

山岸美穂
カルナーの会

さまざまな危険にさらされながら、路上生活を強いられる子どもたち。その負の連鎖を断ち切り、彼らが自分自身の誇りを持ち、笑顔で暮らしていけるよう、救済自立支援のサポートを北タイでおこなうカルナーの会の活動を紹介します。

北タイのストリートチルドレン救済自立支援

カルナーの会は一九九九年からチェンマイの「アーサー・パッターナー・デック財団（以下V C D F）」のパートナーとして北タイのストリートチルドレンの救済・自立支援活動をサポートしている。彼らは多くの場合、タイ北部、または国境の町メーサイをとって、ミャンマー側から来た山岳民族の子どもたちで、幼いころから夜遅くまでナイトバザールや観光地で花売りや物乞いをしている。ほとんどの子どもたちは国籍も無く、路上やスラムで生活し、教育を受けられず、強制的に労働させられている。さらに性的搾取を受けたり人身売買の犠牲者になったりし、麻薬、H I V / A I D S などさまざまな危険が子どもの身近にある。二〇〇六年のV C D Fの調査では、チェンマイ県とチェンライ県のストリートチルドレンは少なくとも合計五〇〇人いる。V C D Fスタッフは彼らがいる場所に出向いて接し、人間関係を築いていく。そして活動を通じて彼らに希望を持たせ、新しい人生の道が選択できるように導きながら自らの力で再び社

会に向けて歩み出せるようにしている。現在、チェンマイ県とチェンライ県にそれぞれ、子どもの緊急避難場所の提供を目的とした「ドロップインセンター」および、路上生活から抜け出すことを希望した子どもたちが共同生活をする「子どもの家」というふたつの施設がある。

「カルナー」とはタイ語で「慈愛」の意味がある。本会では、「子どもの家」の運営支援をはじめ、さまざまな面で子どもたちの救済自立支援にかかわっている。たとえば「里親里子制度」は、救済された子どもたちに、里親を一对一で紹介し、その教育支援金によって通学させ、日本のお父さん、お母さんとして精神的な支えとなるよう、手紙や訪問などで交流をはかるものである。また、「教育ファンド」は、就学前のホームスクールや職業訓練校の学費に充てるため、会員からの寄付で設立・運営している。

アートセラピーと自立支援の場としてのドーデックギャラリー

レンの青少年のなかには生活の術をもたぬまま幼くして母になった子どもたちもいるが、幼子を抱えながらできる製品作りで収入をえることは彼女らの自立を助け、二世世代のストリートチルドレンを産む連鎖を断ち切るにもつながっている。

子どもたちの誇りのために

カルナーの会では、これらの製品をさまざまな催しや日本各地のフェアトレードショップなどを通じて販売している。日本では発送費やパーツの変動を考慮して現地より少し高めの価格で販売しているが、年度末に諸経費を除いた利益をV C D Fに送り、子どもたちのために役立てている。

日本での取り扱い数が増えてきたのはうれしいことだが、商業ベースに乗せるにはまだ至っていない。子どもの家の子どもたちは学業や共同生活のなかでの仕事が第一で、それらに支障が出ない範囲で週末や長期休みに商品作りをおこなっている。町なかの青少年たちに対しては、直接指導できるスタッフ数が少ないこともあって、一般の商品と同様に均等で一定レベルにそろえて商品を製作するにはまだ道半ばである。しかし、自尊心を高めることにもつながるこれらの製品作りは、彼らの生きる力として大きな効果を上げている。今後もひとりでも多くの子どもが自分自身に誇りをもって明るい笑顔で生きていくことができるように、活動を続けていきたい。

過酷な生育歴をもち、心身ともに深い傷を負っている子どもたちに、自信と誇りを取り戻してほしいと、子どもの家やドロップインセンターでは日常的に音楽や美術、農作業などさまざまな活動をおこなっている。例えば、子どもたちの興味関心に合わせた手工芸品の制作は精神面の回復や創造性を養い、自分の価値を見直し自信をもたせるためのアートセラピーとして効果的だ。また、自己表現力や集中力の向上にもつながる作品づくりは、将来自立するための技術習得にもなっている。これらをより発展させるために、V C D Fは二〇〇八年一月、チェンマイ市内に子どもたちの作品を展示販売する「ドーデックギャラリー」をオープンした。「子どものための」という思いを込めた名称である。手縫いマスコット、木の実やビーズのストラップ、手染め布を縫製したバッグなどを販売し、その売上げのうち、三〇パーセントを製作した子どもに還元、三〇パーセントを奨学金及び職業訓練のための基金、残り四〇パーセントをギャラリーの継続的な運営のための基金に分配されている。製品を作るのは大きく分けてふたつのグループである。ひとつは路上生活から抜け出して子どもから通学している子どもたち、もうひとつは元ストリートチルドレンで今はスラムなどに住んで自立しようとしている青少年たちだ。義務教育を終えて子どもを出た後、この基金を利用して銀細工の修行をし、オリジナルのシルバークセサリーを作るができるようになった青少年もいる。作った子どもの収入は、金銭管理教育の機会にもなる。また元ストリートチルド



チークの端材を糸鋸(いとこのこ)で切り、キーホルダーに



ドーデックギャラリー入り口の看板



端材に下絵



子どもの家でのマスコット作り



カード作成の下絵描き